

# 英語リーディング教材を利用した教 養力を高める試み

森永弘司(同志社大学)

日本国際教養学会第1回全国大会

# 発表概要

1. 現在の大学の英語教育の潮流
2. 教養教育の意義
3. 今回の実践報告の目的
4. 参加者
5. 使用したテキストの狙い
6. テキストに収録した著者と作品
7. レポート課題に関して
8. 取り上げられた著者と作品及び人数
9. 結果についての考察
10. まとめ
11. 引用文献

# 1. 現在の大学の英語教育の潮流

## 1. TOEICの得点増を主眼とするカリキュラム

- (1) 標準テストとしての信頼度が高いので、教育効果測定の客観的な指標になる。
- (2) 企業がTOEICの得点を重視する傾向が強くなってきている。(ユニクロ、楽天では将来社内言語を英語にすることを公表している)

## 2. ESPプログラムの導入の増加

ESP (English for Specific Purposes) 専門に特化した英語カリキュラムの増加, 例えば English for Science and Technology, English for Business, English for Nursing

筒井清忠氏は讀賣新聞の2月6日朝刊の「論点スペシャル 問われる大学の価値」の中で1991年の大学設置基準の改正(一般に「大綱化」と呼ばれている)以降,教養教育軽視と専門主義・実用主義偏重が始まったことが現在の大学が抱える3つの大きな問題の1つであると指摘している.

## 2. 教養教育の意義

- ・筒井(2012) — 人間や社会の複雑さを学び,短絡的な発想抑える. 人間や社会を広く深くとらえる「総合的知識人」の育成
- ・仲正(2008) — 教養の本質は「知的な討論をするための基礎的な能力」の養成
- ・瀧本(2011) — リベラル・アーツは「人間を自由にするための学問」  
私流に解釈すると「人間や社会の問題を考える際に偏見に囚われずに多角的な視野から考察できる知性」

### 3. 今回の実践報告の目的

戦前の旧制高校では学生は主として古典的名著の読書によって教養を練磨した。戦前の旧制高校に相当する現在の大学の教養課程では、大綱化以降の専門主義・実用主義偏重のため教養を深める教育を受ける機会が大幅に減少してしまった。また学生の読書時間も年を追って減ってきている。

そこで学生の教養を少しでも深めさせる目的で、古典的名文(主として小説)を14篇収録したテキストで授業をおこなった。そして14人の著者から1人の著者の作品を読んで感銘を受けた点を報告するレポートを課した。今回の発表では、このレポートの結果を報告すると共にレポートの内容から窺える名文に親しむことの効用について述べてみたい。



## 4. 参加者

参加者は昨年度担当した関西地区の共学の私立大学の学生175名と女子大学の学生93名の計268名と今年度担当した共学の大学の学生27名の総計295名である。共学の学生は文系と理系の1回生から7回生まで広範におよぶ。女子大学の学生は理系と文系の1回生である。

## 5. 使用したテキストの狙い

テキストは研究社刊『名文で養う英語精読力』(2009)を使用した。このテキストは難度の高い英文を正確に読みこなせる精読力を、parsing(構文分析)の技法を身に付けることによって習得させることを狙いとするものである。また文学作品を多く取り入れたのは、文学作品を読むことによって養われた文学的素養が、「それを身につけた人の人となりを作っていく重要な要素」になり、文学作品を読むことで身につけた英語が「のちのち教養として輝きを放つような英語の基礎となる」齋藤(2009)ことを願ったことからきている。

## 6. テキストに収録した著者と作品

著者	収録作品
1. George Orwell	<i>Animal Farm</i>
2. Elisabeth Kubler-Ross	<i>On Death and Dying</i>
3. O. Henry	<i>A Retrieved Reformation</i>
4. George Gissing	<i>The Private Papers of Henry Ryecroft</i>
5. Ernest Hemingway	<i>The Old Man and the Sea</i>
6. Rachel Carson	<i>Silent Spring</i>
7. William Wilkie Collins	<i>Family Secret</i>

8. Henry David Thoreau	<i>Walden</i>
9. William Somerset Maugham	<i>The Summing Up / A Writer's Notebook</i>
10. Arthur Waley	<i>The Tale of Genji</i>
11. William Henry Davis	<i>The Autobiography of a Super-Tram</i>
12. Winston Churchill	<i>My Early Life</i>
13. William James	<i>The Varieties of Religious Experience</i>
14. Robert Lynd	<i>Afternoon Tea</i>

## 7. レポート課題に関して

上記のテキストに収録されている著者の中で最も関心を持った著者の作品を一つ取り上げ、感銘を受けた点をA4で2枚以上で論じさせるレポートを課題として課した。原書での読書は難しいので、翻訳で読むことも認めた。学生が取り上げた著者と作品は以下の通りであった。取り上げられた人数が多かった著者の順に記す。最初に1年目の結果を示す。

## 8. 取り上げられた著者と作品及び人数 (英字はテキストに収録されている作品)

著者	作品(人数)	人数
1. Ernest Hemingway	<i>The Old Man and the Sea</i> (35), 誰がために鐘は鳴る(2), 武器よさらば(2), 日はまた昇る(2), 二つの心臓を持つ大河(1), フランシス・マコマーの短くて幸福な一生(1), 殺し屋(1), 挫けぬ男(1), 異国にて(1), 清潔で明るい場所(1), 白い象のような山並み(1)	44
2. O. Henry	<i>A Retrieved Reformation</i> (17), 最後の一葉(14), 賢者の贈り物(10), 煉瓦粉長屋(1)	40
3. Rachel Carson	<i>Silent Spring</i> (34), センス・オブ・ワンダー(1)	35

4. George Orwell	<i>Animal Farm</i> (10), パリ・ロンドンどん底生活(1)	11
4. William Wilkie Collins	<i>Family Secret</i> (5), 黒い小屋(2), 恐怖のベッド(1), 狂気の結婚(1), 白衣の女(1), ならず者の一生—その誕生から結婚まで—	11
5. Elisabeth Kubler-Ross	<i>On Death and Dying</i> (7), ライフ・レッスン(1), 「死ぬ瞬間」と臨死体験(1)	9
6. Arthur Waley	<i>The Tale of Genji</i> (7)	7

7. George Gissing	<i>The Private Papers of Henry Ryecroft</i> (5)	5
7. William Somerset Maugham	月と六ペンス(4), アリとキリギリス(1)	5
8. Henry David Thoreau	<i>Walden</i> (3)	3
9. Winston Churchill	<i>My Early Life</i> (2)	2
10. William Henry Davis	余暇(1)	1
10. William James	心理学について—教師と学生に語る(1)	1
10. Robert Lynd	<i>Afternoon Tea</i> (1)	1



## 2年目の結果

2年目はエンターテイメント性の強いO. HenryとWilkie Collinsはレポートに取り上げないよう指示した。

著者	作品(人数)	人数
1. Ernest Hemingway	誰がために鐘は鳴る(6), 日はまた昇る(3),武器よさらば(3),移動祝祭日(2), アフリカの緑の丘(1)	15
2. George Orwell	Animal Farm(1),パリ・ロンドン放浪記(1),1984年(1)	3
2. Elisabeth Kubler-Ross	続 死ぬ瞬間(1),子どもと死について(1),エイズ 死ぬ瞬間(1)	3

4. William Somerset Maugham	月と六ペンス(1) お菓子と麦酒(1)	2
5. William James	純粹経験の哲学	1
5. George Gissing	南イタリア周遊記	1
5. Arthur Waley	李白	1
5. Rachel Carson	われらをめぐる海	1

## 9. 結果についての考察

1. Hemingwayの『老人と海』とCarsonの『沈黙の春』の人气が高かった。『老人と海』は老人のストイシズムと不撓不屈の精神を高く評価する意見が多かった。カーソンを多くの学生が取り上げたのは、彼女の自伝が高校の教科書で扱われていることも一因となっているように思われる。2年目のレポート課題でもHemingwayを取り上げる学生が圧倒的に多く、その理由として、名前は知っていたが作品は読んだことがないので読んだと書いている学生が多かった。
2. 短編の名手O. Henry, 推理小説の始祖Wilkie Collins のようにストーリーの面白さ、巧みさで読ませる小説の人气も高かった。この二人の小説をもっと読んでみたいと書いていた学生も多くいた。

3. *The Private Papers of Henry Ryecroft*, *Walden*, *On Death and Dying*, 『純粹経験の哲学』のような深い思索に裏付けられたエッセーに取り組んだ学生のレポートは、いづれも読みごたえのあるものであった。
4. 今回の課題レポートで普段読む機会のない名文や小説を読むことができて良かった記載していた学生も多くいた。

## 10. まとめ

1. 今回の課題レポートで、翻訳とはいえ学生に名著を読む機会を与えることができたので、学生が教養を深める一助となったと思う。
2. 近年菅原(2011)や鳥飼(2011)によって精読力養成の重要性が唱道されるようになってきたが、今回の名文のアンソロジーのテキストの指導で、このテキストが精読力や文法力を鍛える上で効果のある題材であることが判明した。(Morinaga (2012) “Attempt to Teach Literary Texts Utilizing Minai’s Parsing Method”を参照されたい)

3. 授業及びレポートを読んで小説が学生にとって人気のあるリーディング教材であることを実感した。発表者のアンケート紙調査でも共学の大学の文系学生(参加者235名)の3人に2人,理系学生(参加者459名)の2人に1人,女子大学(参加者205名)の5人に4人がリーディング教材として小説を読みたいと答えている。大学の英語教育の現場でもう少し小説がリーディング教材として使用されることを願って発表を終わらせていただく。

# 11. 引用文献

斎藤兆史・中村哲子(編注)(2009)『文学で学ぶ英語リーディング』 東京:研究社

菅原克也(2011)『英語と日本語のあいだ』東京:講談社

瀧本哲史(2011)『武器としての決断思考』東京:星海社

鳥飼久美子(2011)『国際共通語としての英語』東京:講談社

仲正昌樹(2008)『知識だけあるバカになるな！ 何も信じられない世界で生き抜く方法』 東京:大和書房

薬袋善郎(編著)、森永弘司(企画・編集協力)(2009)『名文で養う英語精読力』東京:研究社

讀賣新聞「教員「ムラ社会」改善を」2012年2月6日 朝刊 筒井清忠

Morinaga, K. (2012) “Attempt to Teach Literary Texts Utilizing Minai’s Parsing Method” 3<sup>rd</sup> Annual LIBERLIT Conference

ご清聴有難うございます